

佳作

自宅の最寄り駅から、それなりに混んでいる北行きの赤い電車に乗る。ラッシュはそれほどでもない。しばらくして津島駅に急勾配で駆け上がり、7時53分に着く。高架駅と言っても1面2線のホームしかないし、高さも普通のマンションから見下ろされる程度の高さだ。でも、電車から降りて一息つき、電車が通り過ぎた後、人ごみの中から見えるこじんまりとした町の景色が好きだ。

その中でも、西に向かって津島神社まで伸びる天王通りは私にとって秀逸だ。その両側に並ぶ昭和感満載の商店や高さが揃っていない建物の列は、とても愛らしい。

ホームの規模に引換えやたら長い階段を降り、自動改札を通り過ぎ、空き店舗の列を見ながら、駅の構内を出る。ロータリーを越えた交差点の角が私の職場、尾張銀行津島支店。

自己紹介が遅れた、私は河野咲穂、26歳。みんなからはサキとか呼ばれてる。独身彼氏なし。その辺の事情は放置しておいて欲しい。

「おはよう」

通用口から店に入ると、私の上司の橋本融資課長と出くわす。

「おはようございます」

「おはよう。河野、今日はあの石崎さんの売買があるから心して行けよ」

「はい、分かっています」

『あの石崎さん』というのは、借入の返済が遅れている60絡みのおばさん。夫婦で喫茶店を長くやっていて、津島では人が多く集まる人気の店だったようだ。このお店は石崎さん名義になっている。バブルの時期に津島といえども、自分の店にするには相当儲かっていなければならなかったことだろう。

けれど、2年ほど前に旦那さんが亡くなってから、おばさんは意気消沈してしまって、店を開けたり開けなかったり。これでは常連客も離れてしまう。そんなことから、店の改築資金で借りた借金の返済も滞りがちだった。私は返済をしてもらうために、おばさんに電話やら面談やらをしていた。けれども、

店の売上は安定せず、なかなか延滞状態からは脱出できなかった。

「でもあのおばさん、よく店を手放して売る気になったよな。うちの銀行は買主に融資できて、かつ延滞も解消できるのだからいいんだけどね」

そりゃ、融資課長としてはほくほくだろう。でも、私はおばさんの店に何度も督促のために足を運び、レジからなげなしの売上代金を集金して返済してもらったこともあるのだから、複雑な気持ちになる。

「はい、ミスの無いようにしっかりとやります。」

ある意味会話になっていない言葉を課長に返し、朝の準備に入る。

金庫からいろんなものを出し、朝礼も終わったところで、おばさんのことを考える。最後におばさんの店に行ったのはいつだったっけ。確か一ヶ月くらい前に、やはり入金をお願いをしに行ったきりだ。確かこんな感じだったはずだ。

基本的に内勤の私はシャッターが閉まる3時を越えてから外に出るから、その日もそのくらいの時間だったはず。銀行を出て、天王通りを西に数分行くと、おばさんの店がある。築何十年かの時を経たいわゆる昭和の匂いを残した喫茶店。確かにこの平成の世では一見客はなかなか入りにくい感じはある。

ただ、ちょっと違った意味での常連である私は、ちょっと違った意味でためらいながら扉を開けて中に入る。

「こんにちは」

「いらっしやいませ。あれ、サキちゃん」

「ごめんなさい、今日も入金のお願いにきました」

「いいのよ、気にしなくて。あなたの仕事なんだから。今日は津島商工会議所の人たちが来て、打ち合わせして行ってくれて、ランチも食べてってくれたから、売上はそこそこあるわ」と言いながら、レジからお金を取り出す。

「今日も一回分でお願いできるかしら」

変な話だが、こちらが恐縮してしまう気分になる。本当はあと一回入金してもらわねばならないのに。そして、コーヒー一杯くらい飲んで行きなさいよ、の声の誘惑に躊躇なく誘われることになる。

いつもどおり、私に対する恋バナ（实例がなく想像ばかりであるが）や、気に入った俳優の話、はたまた昔の津島の駅前の話などを聞いたような。

その時には、お店を売るなんて話は一回も出なかった。

その日から度々訪問や電話はしたものの、店は閉まっていることが多く、ついぞ今日までおばさんには会うことがなかった。

おばさんの店を売ることになった、と聞いたのは、同僚の営

業の広瀬くんからだった。

なんでも、津島の商工会議所から、喫茶店を開業したいという鳥川さんという東京帰りの男性に融資をつけてくれないか、という話があった、とのことだった。石崎さんの喫茶店を居抜きで売ってもらおうよう、鳥川さんが申入れ、話がまとまったということだった。

鳥川さんへの融資話は、すんなりと稟議も通った模様で、売買の話は今日に決まった、と聞いたのが四日前。広瀬くんは出来る男だから準備は抜きかりなく、今回河野さんは出番ないよ、と言われたのには慥然とした。

でも、なんでおばさん、私に言ってくれなかったんだろう。

あつという間に午前10時になる。銀行の応接室に売主のおばさん、買主の鳥川さん、広瀬くん、仲介の不動産屋さんと、司法書士の先生と、そして私が一堂に会する。

おばさんとは、今日は大勢の人がいるからか、挨拶を交わすだけ。

一方、買主の鳥川さんはよく喋る。

「僕、もともと津島の人間なんです。津島高校へ通ってました。そこから東京の大学に行って、ほら、そのころ就職氷河期であまりいいところに就職できなかったんです。このままサラリーマンとしてうだつの上がらないまま人生を過ごしていく

の、嫌だなと思って、いつかは地元に戻って、例えば喫茶店のオーナーなんかの一国一城の主になりたい、と思って、一生懸命貯金して、で、津島に帰ってきて、アルバイトをしながら商工会議所の創業スクールに通って、そこで中小企業診断士の春本先生に厳しいご指導をいただいて、商売の実務を勉強しました。また、この懐かしい津島の町を歩いていて、学生時代あったこともある石崎さんのお店を見て、ああ、こういう雰囲気のある喫茶店をやってみたいな、と思ってることを商工会議所に話したら、石崎さんにつないでくれて、トントン拍子に今日、お店を買うことになった、という感じでもう、津島に帰ってきて本当に良かったなあ、と毎日思っていて……」

ああ、あの日の商工会議所の人達の打ち合わせ、というのはこのことだったのか、と改めて思う。とはいえ、あまりにも長広告なので、

「そろそろ、手続きに入りませんか」と、思わず私が割って入ってしまった。

でもそこからは、広瀬くんの準備のおかげか順調に進んでいった。

「はい、これでお取引完了です」

広瀬くんが誇らしげに宣言する。尾張銀行津島支店の、いや広瀬くん自身の成績に直結するのは当然だが、鳥川さんは夢の

第一歩を踏み出せたわけだし。おばさんは借金を返して、まだそれなりのお金は残っている。これからの人生を過ごして行くには、やや足りないかもしれないが、それでも同世代の人と比べれば、恵まれたほうだろう。

不動産屋さんが、鳥川さんにいろいろな説明をしている。なんでもあまりにもスムーズに事が進みすぎて、おばさんのほうの引き渡しの準備が済んでいないので、1週間程度はおばさんは引越し出来ないらしい。

「サキちゃん、ちょっといいかしら」

と、声をかけられたのは、全ての手続きが終わって、皆が応接室から出るところだった。

「どうかしました？」

私の問いかけには答えず、席に座っている橋本課長に向かって、「おたくのサキちゃん、ちょっとお借りしますね」

と声を掛ける。課長はいきなり声を掛けられたせいか、どぎまぎしてうなずいている。

「さて、ちょっと早いけど、ランチをごちそうするわね」

スタスタと銀行を出て、さっさと天王通りを歩いていく。外はちょっと寒い。歩道はあるものの、狭い道の割にはクルマの通る量が多いから、人はなんとなく縮こまって歩かなきゃいけない。だから人通りが少なくなる原因にもなるんだろうけど。

よって、私とおばさんは、反対側からくる人や自転車などに気

を使って、縦列で歩かなきゃいけなくなって、自然、会話も弾まない。

「さあ、着いたよ」

下を向いて歩いていた私は、おばさんの声で、店に着いたのがわかる。顔を上げると本日閉店の木札がかかっている。

「ささ、入って入って」

おばさんは、そのまま店のドアを開ける。この店売り物なのに、さらに言えばさっきの売場で他人さんのモノになったのに、鍵もかけずに出てきたらしい。おばさんらしい、と言えばおばさんらしいんだけど。

「あのお……」

一体なんて言っているかわからず、あいまいな言葉をおばさんに投げてしまった。

「いいのいいの、サキちゃんちょっとお話ししたかったから、

さあ、さっさと座って」

私はお気に入り窓際の席に座る。

久しぶりに座るその古びたソファは、古びてはいるが風が遮られて太陽の光だけが入ってくるので、心なしか暖かい。

「ごめんね、サキちゃん。今日まで黙ってた」

「いいんです。鳥川さんの担当から聞いてましたから」

「いつものランチ作るから、ちょっと待っててね」

しばらく手持ち無沙汰で、この店の行く末を考える。鳥川さ

んがオーナーになったらどうなるんだろう。事業計画をちよつと見せてもらったたら、昼間は喫茶店、夜はちよつとしたお酒も出すお店になるようで、内装の改装にも十分にお金をかけるみたいだから、この昭和の雰囲気も消えてなくなってしまうのかな。と思うと私も少し寂しくなる。

「おまたせ」

そう言いながら、おばさんは得意のハンバーグランチをテーブルに持ってくる。二つ分だ。

「私もご一緒させてもらっていいかしら」

と、にやりとしておばさんは向かいの席につく。

「あたりまえじゃないですか」

「では、ご同伴、甘えさせてもらって、いただきますーす」

「いただきます」

まず、私は黄身の焼き具合が絶妙な目玉焼きから手を付ける。ハンバーグのソースと絡み合ったこの味、いい。

「あのね」

「なんですか」

「サキちゃん、ありがとうね」

「いきなりどうしたんですか」

「いつも、返済が遅れがちなおばさんのところに集金に来てくれて、あまりいいお客さんでもない私に、いつも笑顔で接してくれて。私ね、他にも少しばかり借金があるけど、そういう

取立てに来る人って威圧感たつぷりで、そんな中、借金の取立てにくるのに、こんなおばさんの雑談にも付き合ってくれるし、なによりいつもニコニコしてて、こちらが逆に癒されてたところもあったの。サキちゃんには嫌な思いさせたくもないうし、ほら、あの出来のいい同僚の営業マンにいいところを持ってかれたみたいだし、ごめんね」

「いえ、うちの成績にもなりましたし、そんなこと言っていたいで、うれしいです」

おばさんの顔を真正面で見ると、うるっときそうだから慌ててハンバーグを口に押し込む。これからこのハンバーグももう食べられないのかな。

「そういえば、これから石崎さん、どうするんですか」

「そう、それも言っておかないとね。私の姉がね、名古屋で小料理屋をやってて、そこを手伝うことになったのよ。姉も独り身だから、二人口は食べる、ではないけど、そこへ転がり込んで、家賃の代わりに手伝うことになったわけ。だからまた食べに来てね」

と言いながら、おばさんが差し出した角の丸い小料理屋の名刺を自然に私は受け取る。

「だから、このハンバーグもサキちゃんが来てくれるなら、出しちゃおうかな」

ちよつとだけ、ほつとする私。でもどうも涙腺が緩みそうで、

無言でご飯を頬張る。

おばさんの問わず語りは続く。

「それでね、この店も、平成が始まる頃からだから、30年近くやってることになるから、愛着もあるけれど、もう時代遅れかな、と思うところもあるの。鳥川さんみたいな若い方が、新しい感性で新しいお店を作って行かないと、天王通りも、津島も古いままで取り残されちゃうんじゃないか、とそう思ったから、それにね、あまりサキちゃんにも迷惑かけてもいいけないから……」

思わず鼻をすすってしまふ。いけない。

「まあ、思ったよりいい値段で買ってもらえたというのが一番の決め手だったかもしれないけれどね。それでもやっぱり長年ここで商売してきたんだもの、この天王通りにも、津島にも愛着あるわよ。少しでも賑わいを大きくするためにも、こんな老いぼれが開店休業状態で店をやるよりも、もう新しい人に後を託して、しっかり店を開いてもらったほうがいいと思ったのよ……」

おばさんの声のトーンも変わる。おばさんも自分が作ったサラダを口に運ぶ。

そこからは二人とも無言。

鼻の奥がツンとなりそうなのを、ハンバーグの旨さでごまかすんだけど、そして飲みたくもないお水を飲むんだけど、おば

さんがこの店で作るランチはこれで最後になるんだろうなという思いが、また泣きそうになる気持ちを喚起させたりして、もう行ったり来たりで気持ちはずちゃぐちゃ。

「ごちそうさまでした」

「コーヒーも飲んで行きなさいよ」

といって、キッチンに戻り、カップを二つ運んできて、自分の席に座るなり、もう話すことは話尽くしたのか、ゆったりと外を見ながらコーヒーをすすり出すおばさん。

「そろそろ帰ります」

コーヒーの味はあまりわからなかったけれど、もうこれ十分だ。この店の雰囲気は十分味わったよ。

「そうね、あまり油を売っているとあの課長さんに叱られるからね」

「えっと、お勘定は」

「いいわよ、今まで迷惑かけてきたお詫び」

遠慮なく好意を受け取ることにする。ちよっとお辞儀をしておいた。

「また来てね。この店にも」

「はい、新しい喫茶店も見てみたいです」

「あなたたちみたいな若い子が来ないと、こういう店はダメだからね。それからよかったら名古屋の方にも来てね」

「はい」

あまり長く喋りすぎると、また涙が出そうだから、お辞儀をして外に出る。

天王通りを銀行まで帰る途中、名残惜しくて振り返ると、年輪を重ねたおばさんの喫茶店が小さく見えた。小さいながらもこの通りの一員として根を生やしてきたお店。近々衣替えをするが、はやくこの通りに溶け込むといい。

ふと気づくと向かい側に観音寺が見えた。

そうだ、おばさんの今後の人生が平穏なることを、それと新しい鳥川さんの喫茶店の繁盛を祈って、そしてこの天王通りに関わる皆が幸せであるよう、お賽銭を上げていこう。

課長の怒り顔がちらりと頭に浮かんだが無視。

お祈りしたあと、観音寺と同じ敷地の稲荷堂のおみくじを引いた。吉と出た。

〈了〉